

## ポスター発表「公立中学校相談室での動物飼養実践 『ゴマちゃんが教室にやってきた』」

続木 奏絵



### はじめに

私は公立中学校の相談室に勤務していた。相談室には、対人関係や感情表出がうまくいかず、また家庭環境のことなどで悩みを抱える子どもたちが登校してきていた。子どもを否定することなく、そばで寄り添ってくれ、子どもたちに元気や勇気を与え心の支えとなる存在がほしいと思っていた。また子どもたちの緊張を緩和してくれる存在が必要だった。

2015年7月に私が、動物愛護センター「ハローアニマル」より、ウサギ(5歳 メス 名前はゴマちゃん)を譲り受け、相談室で飼養を始めた。相談室に通っていた中学1年生から3年生の男子9名、女子15名の合わせて24名がゴマちゃんにかかわった。ゴマちゃんは、授業時間中は相談室で過ごし、夜間・休日は私が自宅に連れて帰るようにし、ハローアニマルの職員の方にゴマちゃんの飼い方や健康上の相談に応じてもらったことで、1年6ヶ月と15日、相談室で子どもたちと共に過ごし、毎日子どもたちを支え元気や勇気を与えてくれた。

2017年1月にゴマちゃんが体調不良となり、同年2月には動物病院を受診、入院した。今度は子どもたちがゴマちゃんの介護をして支えた。獣医師の先生は、最後は子どもたちが看取れるように退院の配慮をしてくれたが、老衰のため死んでしまった。ゴマちゃんが死んだのは休み

の日で子どもたちは看取ることができなかったが、子どもたちに連絡をすると皆登校し、きちんとおわかれすることができた。

また、この動物飼養実践はハローアニマルと獣医師の先生の協力により行うことができた。ここではゴマちゃんと子どもたちのかかわりによる3事例を報告する。



### 1 事例1「ゴマちゃんは社会とのつなぎ役」

自宅でウサギを飼っていたAさんは、中学3年間、月1回、ハローアニマルでおこなわれている不登校支援事業に月1回1時間動物のお世話などを体験する事業に通っていた。この3年間は不登校であったが、ハローアニマルから譲り受けたゴマちゃんについての話が相談室職員との共通の話題となり、学校とつながるきっかけとなった。

登校し相談室に寄っていく時は、ゴマちゃんに会っていくこともあった。ゴマちゃんを見て触っている時のAさんは、緊張がほぐれ柔らかい表情をしていた。Aさんにとって学校は緊張する場であったが、ゴマちゃんはAさんの緊張を緩和してくれていたのだろう。また、家庭訪問をした際も、「今日ゴマちゃん〇〇だったよ」などゴマちゃんの話を出すと自然と笑顔になった。学校の話だけだと苦しくなるが、勉強のことでも学校のこともないゴマちゃんの話はAさんの笑顔を引き出してくれた。このような時間を重ねていく中で、ある日、Aさんの自宅で飼っていたウサギが死んでしまったとAさんが

ら聞いた。何日かして登校した際、ゴマちゃんに会い、ゴマちゃんを触りながら柔らかい表情で「ふわふわ。かわいい。」と言い、飼っていたウサギを思い出しているように見えた。ゴマちゃんがいてよかったと思えた瞬間だった。

また、学校には行かない選択をしたAさんだが、ゴマちゃんがいたことで、また、ゴマちゃんとふれあう時間があったことで、学校とつながったり、相談室の仲間と同じ空間で過ごすことができたり、家庭とハローアニマル以外の居場所が生まれた。ゴマちゃんは、Aさんと社会との間を取り持つ大切な存在となった。

Aさんがハローアニマルに行くときは、学校からハローアニマルへの届け物をしてくれたり、ゴマちゃんのためにハローアニマルから預かりものをしてきてくれたりした。ゴマちゃんが必ず間にいることで「ゴマちゃんのために」という目的が生まれ、こういったやりとりの積み重ねが、Aさんの人との関係性を広げてくれたのだと考える。

今までは自分から話してくることはほとんどなく、何か思ってもなかなか言葉にならなかったAさんが、現在は、自分から質問をしてきたり、気がついたことを言ってくれたり発語も増えて、表情も生き生きとしている。Aさんの保護者は、「学校という独特な空間に、動物の存在感や息づかいが感じられることは、気持ちがホッとしたり、つかの間の気分転換になったりするのでもいいと思う」と話していた。

Aさんはゴマちゃんとのかかわりの中で緊張が緩和され、自然と気持ちが落ち着いたり、ゴマちゃんのために会いにきてくれたりする中で、自分から次の目標を見つけ、自分の足で、前に進み始めたのだと考える。

## 2 事例2「ゴマちゃんは人とのつなぎ役」

Bさんは、対人関係が苦手で人とかかわることを拒んでいた。ものの扱いや言葉遣いなども、ややぶっきらぼうだった。そんなある日、私が「ウサギが教室にいたらいいよねえ」と言うと「そうですね」と答えた。Bさんと一緒にハローアニマルに行き、どんなウサギがいるか見ながら、ゴマちゃんに出会った。後日、ゴマちゃんを

譲り受け、学校に連れていった。

ゴマちゃんがやってきた当初Bさんは、特別可愛がるわけでもなかった。しかし、勉強をしている時も、ボーッとしている時、給食の時、お掃除をしている時、迷っている時・視界の片隅には必ずゴマちゃんがいたようだ。休み時間などの隙間の時間にはゴマちゃんをボーッと眺めていた。その時は暇つぶしくらいの気持ちだったかもしれないが、Bさんにとってゴマちゃんは、何も言わずただそばにいてくれるだけで安心する存在となっていたのだろう。後に「一人の時もゴマちゃんがいたから寂しくなかった」とその時のことを振り返っていた。

Bさんは次第に私が「ちょっと手伝って！」とゴマちゃんのお世話の手伝いを促すとだんだん行うようになり、自分の役割の一つとして、掃除の時間などに自分から進んでゴマちゃんのケージの掃除をしてくれるようになっていった。

そんなゴマちゃんを共通の存在・話題として相談室の仲間や学校の職員とのかかわりも生まれた。ゴマちゃんに仲間が話しかけている姿を見て思わずわらってしまい笑顔になる。ゴマちゃんがイタズラをすれば、見つけたみんなで会話が生まれ、笑顔があふれた。みんなの前で笑うことにも少し抵抗があったBさんだったが、ゴマちゃんの行動を見て思わず声を出して笑うようになっていった。私がいなくて他の職員からゴマちゃんのことを聞かれると言葉少なげに答えることもできるようになっていた。Bさんは「ゴマちゃんのことをいろんな人と話せてよかった」と話した。ゴマちゃんを介して仲間や職員との距離も少しずつ近づき、徐々に人を信頼するようになっていった。

ゴマちゃんが体調不良になり介護生活が始まると、Bさんはゴマちゃんが倒れると起こしたり、お尻についてしまった便を拭いてあげたり、また、食べやすいようにごはんを準備すると食べられるようになることを相談室の仲間や職員と一緒に喜びあうようになった。以前は汚いなあ、ちょっとやだなあと思いながらお世話をしていたBさんの姿がだんだんと別人のように変わっていった。【助けなきゃ！私がいるよ！】と

いう思いが生まれてきたのだろう。今まではゴマちゃんに支えてもらっていたが、今度は支える側が変わっていった。ゴマちゃんが入院になった時「ゴマちゃん大丈夫ですか？」と心配し、他者のことを気にかける気持ちの余裕も出てきていた。またそれは、ゴマちゃんだけでなく、自分自身はもちろん相談室の仲間に対しても同じだった。Bさんは「ゴマちゃんを大切にしていたら自分のことも大切にできるようになってきた」と話してくれた。

また、Bさんはハローアニマルにも2年間月1回通っていた。ハローアニマルは学校から離れて落ち着ける場所となっていて、そこでも笑顔が増え、社会性も身につく、同時に情緒が安定した。ハローアニマルでも共通の話題はゴマちゃんだった。ハローアニマルでの仕事体験を通して誰かの役に立つことも自己有用感を高め、Bさんの自信となったのだろう。

Bさんは、「ゴマちゃんはゴマちゃん、私は私のままでいいということを教えてもらった」と言い、また「自分は自分、人は人、人と違っていいと思えるようになった。自分を少しは受け入れられるようになった」と中学を卒業してから語ってくれた。

2年間の学校でのゴマちゃんとのかかわりと、ハローアニマルという学校外の居場所の両方が相乗効果となり、Bさんの成長発達に影響を与えたと考える。

### 3 事例3「ゴマちゃんは相談室内でのサポート役」

Cさんは相談室に来るとゴマちゃんの近くに行き、ゴマちゃんによく話しかけていた。否定もせず、何も言わないでいてくれるゴマちゃん存在が嬉しかったのだろう。そんな姿を見て、Cさんに何か伝える時は、「ゴマちゃんが〇〇って言ってるよ！」とゴマちゃんを介在して会話するやりとりを試みた。人から自分のことをいろいろ言われることが苦手だったCさんは、人間だけのかかわりだけだとイライラしたり、聞き入れることが難しく苦しくなったりしてしまっていたが、ゴマちゃんを挟んで会話を重ねることで、相談室職員や仲間の伝えることを聞き入れるこ

とができるようになり、徐々にゴマちゃんを挟まなくても、受け入れることができるようになった。動物を間に挟み会話することは、Cさんにとって伝わり方が柔らかくなり、受け取りやすい形だったのだろうと考える。

また、Cさんがゴマちゃんを触りながらゴマちゃんに「喜んでるの？」と話しかけ、答えを職員がゴマちゃんになりきって「気持ちいい～眠くなってきたなあ～」などと返すと、お互い思わず笑顔がこぼれた。「触ったら喜んでくれて嬉しかった」と言っていた。自己肯定感や自己有用感もこういったところで積み重ねていったのだと考える。

何か上手くいかないことがあったり、悩んでいたりと、登校はしたけどやる気が出なくて元気がない日は、よくゴマちゃんの前にいた。どうしていいかわからず、投げやりになってしまうCさんにとって、何も言わず近くにいる存在、味方になってくれるゴマちゃんがCさんの気持ちを支えていたのだろう。「ゴマちゃんがいるたびに元気になった」と後で話してくれた。

ゴマちゃんが死んでしまいお別れの場面では、休日だったため会いに来るか連絡をしたところ「相談室で生活していることがバレルから行けない」と話した。Cさんはどうしたいの？と訊くと、「行きたい。けど行けない」との答えだったが、しばらくして「やっぱり行く」という連絡があった。ゴマちゃんに会いに来てすぐ「自分で決めて来れたよ」と笑顔で話してくれた。ゴマちゃんの死、お別れはCさんにとって自分で決め動き出すきっかけとなったようだった。

それから、Cさんは少しずつ変わっていった。学校生活でも自ら学習に取り組んだり、自分の思いを伝えたりするようになってきた。そして、相談室で生活していたことを自分から家族に打ち明けることができた。そんなCさんの変化が家族にも影響を与えた。Cさんは家族と向き合い、家族もCさんと向き合っていたことで、進路選択を含め自分の気持ちや考えを具体的に両親に伝えることができた。

「ゴマちゃんから元気やパワーをもらえた。ゴマちゃんのようにがんばって生きる、そう思え



た。」「ゴマちゃんがいなかったら家族に自分の気持ちや考えを話せないまま終わっていたかもしれない」と中学校を卒業してから話した。

### おわりに

この他にもゴマちゃん存在によって助けられた、変化のあった子どもたちはたくさんいる。ゴマちゃんのように、否定せずそばにいてくれる動物と一緒に生活することで子どもたちの気持ちや行動に変化が見られた。

#### ～やさしさ・心～

子どもたちは、ゴマちゃんのぬくもりやあたたかさを感じ、言葉のないゴマちゃんと生活することで、相手を思いやる気持ちや相手を大切にすることを育み、同時に自分自身を大切にできるようになった。また言葉がなくても非言語で通じるつながりを体験できたのではないかと思う。

#### ～いのちの大切さ・生～

元気いっぱいなゴマちゃん、遊んでいるゴマちゃん、ボーッとしているゴマちゃん、食べているゴマちゃん、眠っているゴマちゃん、おばあちゃんになっていくゴマちゃん、ゴマちゃんの介護、入院、死…子どもたちは一生懸命生きるゴマちゃんの姿を目の当たりにした。そして、喜びや安心感、命の大切さ、失った悲しさなど多くのことを感じとつたに違いない。また、死を受け入れ、しっかりお別れができたことで、子どもたちはひとりひとり次のステージに進むことができ、また自分自身の前向きに生きる力に変えていったのだろう。

#### ～ふれあい・支え～

否定することなく、だまって、ただただそばにいてくれたゴマちゃん存在は、子どもたちを一人ぼっちにせず、子どもたちがひとりじゃないと感じることで、ゴマちゃんが必要と感じ、ゴマちゃんに支えてもらっている体験をしたのだろう。そして、ゴマちゃんを必要と感じた子どもたちは次第に、誰かを《必要》と思えるようになったのだと思う。

ゴマちゃんの介護生活が始まると今度は子どもたちがゴマちゃんを支えた。こういったかわりの中で、子どもたちの自己肯定感、自己有用

感が育まれていったのだと考える。支えられ、支える関係ができた。

#### ～安心・安全～

ゴマちゃんはいつも変わらず相談室にいた。子どもたちにとって安心できる存在がいてくれることで、安心して弱い自分も見せることができたり、気持ちにゆとりができたり、がんばれる力をためたりすることができた。ゴマちゃんがいつも相談室で待っていてくれることで、相談室から出てがんばってくることができたり、向き合わなければならないことに向き合うことができるようになったりした。ゴマちゃんが子どもたちにとって安全基地となっていた。

#### ～ゴマちゃんが引き出してくれたもの・宝物～

子どもたちの笑顔、優しさ、生きる力、伝える力、チャレンジする力、自分で決める力、関係をつくる勇気。また、かかわることの良さを感じることで相手を信じてみる力や、相手を大切にすること、自分も大切にすること。役に立てるかもしれないという自分に気づき、自分が必要とされていると感じ、自分の存在を認めること。これらは、今まで表に現れていなかった本来子どもたちが持っていた力なのだと思う。

子どもたちはゴマちゃんの死を受け入れ、今を受け入れ、自分や他者を受け入れ、次に待っているそれぞれのステージへ一歩一歩向かっていった。

ゴマちゃんと共に生活したことで子どもたちの多くの成長を見て感じた。動物には子どもたちを支え成長させる力があるのかもしれない。

ゴマちゃんは、子どもたち・学校・家庭・ハローアニマル・獣医師の先生など多くの人をつなげ、かかわりをつくり広めてくれた。そして、かかわるって悪くないよ！と子どもたちに教えてくれた。

(上田市立第六中学校教諭／長野県動物愛護センター)

